

多言

「土佐日記」かくわかれがたくいひて、かの人々のくちあみももろもちにて、このうみべにて、にな
びいたせるうた。○下

〔土佐日記考證上〕人々の口あみもろもちにて、○中こは例のたはふれかけるにて、人々の口
かるく、とくもえいひいです、口おもきをくちあみのおもきにたとへていへり。
〔源氏物語手習五十三〕うつゝの人々の中に、しのぶることだにかくれある世中かはなど思ひりて、こ

〔徒然草上〕何事も入た、ぬきましたるぞよき。○中よくわきまへたる道には、必口おもく、とはぬ

類聚名義抄二二口咲談二今音頗妄言也、多言也、

書言字考節用集八
辭○饒舌○多言
言
名物六占人事四
占
傳○登錄○寒山
傳
執三閼

夏山雜談三】下賤ノ人ノ詞多キヲ嘵ト云、紫式部日記ニ、アヤシキシヅノヲノサヘヅリトアリ、源

俗に物に躁がしく多言なるをかくいへり、史記に豈數比齋夫_集

謀、利口捷給哉」と見えたり、

毀人雖中非忠厚之道且爲招殃之基况不中其實乎

言志錄】饒舌之時、自覺氣暴、暴斯餕、安能動人。

雲萍雜志四」一言寺の庫裏を働ける老婆あり、年七十になんくとして、多辯いはんかたなく、あけくれ人の噂をいひ、無益のせひをのゝること、いとかしましくうるさければ、ある人諷諫の